

2022年1月17日(月)～19日(水)

旧東海道ブラ歩き(13) 静岡―掛川宿

今回は静岡(府中)―掛川51kmに2泊3日で挑戦した。初日は静岡から藤枝21km、2日目は藤枝から金谷15km、3日目は金谷から掛川15kmであるが、初日は宇津ノ谷峠越え、2日目は大井川越え、3日目は東海道の難所の一つの小夜の中山越えがあり果たして予定通り歩けるかという懸念があったが、何とか最後まで辿り着いた。総歩数10.5万歩。特に3日目は小夜の中山の急坂を登った峠の頂上からの絶景や芭蕉、西行等々数多くの碑(和歌や俳句)、広重の五十三次図の模写など文化の香りも高く、非常に内容の濃い楽しい旅であった。なお、初日と二日目は当日ホテル到着後スマホで文字を打つのが苦手の小生が口述し、家内がスマホで打ってくれた内容で、謂わば二人の合作である。また今回に限らず旧東海道沿いのトイレは皆最新式且つ清潔で、更に道には一切ゴミが落ちていないのには感心した。日本人の道徳は見上げたものだ。今回の旅行の総費用は二人で73000円。

Day 1、1月17日(月)晴 静岡―藤枝 晴

6時40分のこだま始発で品川を出発。8時過ぎに静岡から歩き出し、若干の休憩をとりつつ夕方5時半に目的地の藤枝のホテルオーレに投宿。一休みの後迎えに来てくれた学生時代のクラブ活動(オーケストラ)の後輩の高橋恒介さんと奥様に会いそのホテル内のおいしいイタリア料理店で何十年ぶりかで旧交を温め楽しい一時を過ごした。

初日は歩行距離が約21キロとこれまでの最長で、かつ途中で宇津谷峠越えがあること、更に高橋夫妻と6時過ぎから会食の約束があることの諸点があるので、兎に角時間内に目的地に着くことを最重点とした。そのため名所旧跡は今までのようには丁寧にみることはできなかった。万一の場合の藤枝までのバスの時刻表やバス停の詳細などを事前に十分な調査を行った上で実行した。後半若干寒くはなったが一日中晴天に恵まれ、また完全に暗くなる前に目的地に到着出来た。これは今後の我々スケジュール作りに大いに自信をあたえるものであった。家からホテルまでの総歩行数は46309歩であった。以下詳細を記す。

静岡発8時10分、8時50分には安倍川に至る。ここで、安倍川餅で有名な石部屋で食べようと思ったが時間が早く開店前であり他の店も同様だったので残念ながら素通りしなければならなかった。安倍川の橋はかなり長い橋だったが、川にはほとんど水がなかったのが意外だった。振り向くと富士山がはっきりと見える。そのまま歩き続けると丸子宿の入り口の標識を通り過ぎた。丸子と言えば丁子屋のとろろ汁、期待をして10時15分頃に到着したが、開店は11時。これで安倍川餅ととろろ汁の二つとも画餅に終わる。丁子屋の建物は江戸時代のままで誠に趣がある(写真1)。トイレも最新式の清潔さでビックリし

た。この軒先を借りて道中4個100円で買い求めたミカンを食べる。丁子屋の前に弥次さん喜多さんがとろろ汁をすっている広重の絵の模写が立っている。更に歩き続け、11時にコンビニでどら焼きとコーヒーで小休止。

いよいよ宇津谷の峠に差し掛かる。12時宇津谷溪谷に至る。街並みは建物が昔のままに残り、道路も美しく整備されている(写真2)。途中にある秀吉ゆかりのお羽織屋さんはコロナで拝観停止中。お腹が空いて来たので、十割蕎麦屋に行くが月曜日定休日。月曜日は定休が多い。突き当たりの階段を登って、いよいよ宇津谷峠越えに掛かる。途中明治トンネル(230メートル)があり、ここを抜けたがトンネルの中では誰にも会わなかった。下りは山道で歩きにくかったが、景色が良く堪能した。尚、宇津谷峠越えの道は秀吉が小田原攻めに際し大軍を通すために新道を開削し、これが東海道になったとのことである。それ以前はこの辺りの蔦の細道が本道であった。途中、道の駅で軽食をとり、14時20分頃岡部宿に入る。岡部宿は昔の街道の面影を残し、道も美しく整備され、いかにも旧東海道を歩いていると旅人に想わせる大変印象深い街であった。

15時40分頃、藤枝宿の入り口に到着した。驚いたことに藤枝の商店街は非常に長く、銀座などの比ではない。しかも、東京あたりでは既に姿を消した、金物屋、鋸の目立て屋などがあり、歩いていて面白かった。勝草橋を16時50分に渡り、高橋君に連絡をとる。かなり寒くなっていたが薄明かりは残っていた。この辺りで両名とも脚がかなり痛くなっていたが、最後の踏ん張りで17時半、完全に暗くなる前にホテルに到着し、部屋で小休止ののち、高橋夫妻と会食した。

高橋君とは何十年も合っていなかったが、同じ先生にViolinのレッスンを受けていたこと、共通の知人が多いことなどから大いに話が弾んだ。場所は駅ビル内のイタリア料理だったがワインを1杯飲んで魚を中心としたフルコースを楽しんだが大変おいしい。しかも一人5000円以下と随分安い。藤枝駅ビルのホテルは高橋君の推薦だったが、部屋は広く綺麗で、大浴場も有り見晴らしも良くふたりは大満足した(朝食付き二人で14000円)。高橋君は有名なViolinist 辻久子の父君の辻吉之助氏から直接Violinの指導を受け、大学のオーケストラではViolaを弾き、NECに入社後研究者としてPrinceton大学に留学して博士号を取得し、後年静岡の大学の教授になり藤枝に永住したが、70才からCelloを始めてBachの無伴奏ソナタ6曲を全部弾き、その後ピアノに転じ、ホテルのある駅構内のピアノでショパンを弾いてくれるという多彩な人物。最近は脳の科学を研究しているとのこと。息子さんの一人はクレモナに留学して現在はViolin工房を開いているとのことだった。食後再会を期して別れた。

Day 2 1月18日(火) 晴、風強し 藤枝一金谷

7時過ぎに起床したがホテルが非常に気に入ったので、ゆっくり朝風呂に入り、朝食も美味しかったのでゆっくり食べたせいで、出発が10時頃になってしまった。それでもなんとか予定通り金谷まで到着し、そこから東海道線で島田に戻って5時過ぎにホテル1-2-3島田にチェックインした。ホテルは藤枝と比べて格段に落ちるが、島田では最も高いホテルだ（二人で朝食付き9800円）。周りに何も店が無く遠いので寿司屋から出前を取り夕食とした。総歩行数3万歩でしかも峠もなく楽な1日だったので、名所旧跡をある程度見ることができた。

藤枝を出て旧東海道に戻り歩き続け、11時45分日本橋から206キロ、これから島田市に入ると言う道標を過ぎ、ようやく島田市にはいる。藤枝は思いの外広いということがわかった。12時過ぎに小綺麗な蕎麦屋があったので45分位昼食兼休憩とした。13時43分下本陣跡。

島田宿は芭蕉が度々訪れた場所とのことで芭蕉が立ち寄った塚本家等の街並みを再現したような通りがあった。更に少し歩くと芭蕉が島田で詠んだ句碑があり、そこには「するがのくにに入て するがじゃはなたち花もちやのにおい」とあった。(写真3)。更に歩き続けると大井川の川越(かわごし)街道に入る。そこは大井川の渡しの人足などがいた家屋がそのままの形で残り自由に見学出来るようになっており甚だ趣のある通りとなっている。(写真4)。例えて言えば箱根の関所跡には当時の関所の建物や人物が配置されているが、ここは当時のままだが更に広い範囲で残されている感じだ。この辺りは島田宿大井川川越遺跡と呼ばれている。そのうちの一つ島田市博物館分館に1人300円払って古い建物の中を見せてもらったが、さぞかし寒かっただろうと言うのが感想だ。ここで大井川渡しの絵を描いた手拭いを記念に求めた。そこを出て堤防に上がるといよいよ大井川だ。大井川渡しの現場へ来たと言う思いで胸が高鳴る。

堤防を鉄橋に向けて200mくらい歩いたが、最後の数十メートルは堤防上から歩道が消え、そこを大型トラックがすれ違い、我々はちょっとでも足を踏み外すと堤防から転落すると言う極めてスリリングな目にあった。これまで旧東海道を歩いて来て最も危険な目に遭った。

15時20分、鉄橋を歩き始める。皆から長い長いと聞いていたが実際に長い。渡るのに20分かかった。この時期水量は少ないが、増水すればさぞかし大変だろうと思った。(写真5)

渡り切って金谷に入る。大井川越しに富士山が見えた。山田屋本陣跡、金谷の一里塚跡、長光寺などを横目で眺めながら歩き続け、金谷坂の登り口に差し掛かるところまで行き、予定通り本日の行動を打ち切り、金谷駅に戻る。金谷にはホテルがなく、一つ手前の島田まで東海道線で戻るためである。正にこの時電車が入ってきて光恒はスイカで飛び込み間に合ったが幸子はスイカが出てこず、もたもたしている間にドアが閉まりかけ、光恒がドアを手で押さえを車掌に合図をしている間に幸子が飛び乗りドアが閉まる。動き出してすぐに車掌から「発車間際の駆け込み乗車は危険ですからおやめください」とのアナウンスがあり、流石に一寸きまり悪い思いをした。

17 時頃島田に戻りホテルにチェックインした。昨日と比べ歩行距離が少なく山坂がなかったなので疲れは少なかった。

Day 3 金谷―掛川 快晴

愈々金谷坂、菊川坂、小夜の中山、日坂(につさか)と今回の最大の難所が控えている。朝、家内が昨夜眠れなかったとのことだったので一旦は中止を考えたが、その後とにかく行ってみようとなり、電車で金谷駅に降り立ち、9 時 20 分出発。かなり急な金谷坂を少し登ると石畳が変わる(写真 6)。安全運転を心がけ喘ぎながらゆっくり進む。10 時 15 分、これを登り切ったところに洒落た珈琲屋があったので小休止、部屋の装飾にも親父さんの趣味が感じられ、ゆっくりと入れてくれたコーヒーもおいしかった。ここで元気が出て出発。直後に武田勝頼の家臣が築いた諏訪城城址を右に見て菊川の石畳の急坂を下りる。11 時 5 分、菊川の里に至る。すぐに歌碑を二つ過ぎ、愈々小夜の中山の登りとなる。ここは東海道での難所の一つとして天下に知られた坂でやっとの思いで登り切る。

11 時 40 分頃登り切ると平坦な道になり見渡す限り茶畑である。快晴で空はあくまで青く高く、もう少し歩いたところでは遠州灘が見え、北には遠くに冠雪の南アルプスが聳える。正に絶景である。偶々金谷から掛川に向かう女性が後ろから迫ってきたので写真を撮って貰った(写真 7)。それから少し進むと愈々島田市と掛川市の境界の立て札が立っている。日坂は掛川市のようだ。この境界を超えたすぐの家の車は静岡ではなく浜松ナンバーだった。勿論道幅も狭く車はたまにしか通らない。お昼を過ぎた頃創業 1700 年代初めの「子育て」の店があったがこの日は生憎休み。このすぐ近くに橋為仲朝臣と西行の歌碑がある。このうち西行のものは「年たけてまた越ゆべしとおもいきや命なりけりさやの中山」とあり、69 才で 2 度目の峠越えの時の和歌だそうだ。このあたりから歌碑、句碑を多く見かけ、和歌のいくつかは古今和歌集に収録されている。これ以外に芭蕉のそれが 2 か所、紀友則、藤原家隆等である。因みに芭蕉の句は「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」である。静岡も丸子宿あたりまでは道沿いでミカンを売っていたが、小夜の中山では周囲は

完全にお茶一色となる。近くの山の斜面に刈り込みを入れて「茶」と読めるように工夫しており、どこからでも見える。気分が良いのと、お腹がすいたので道端に座り込んで魔法瓶の紅茶と家から持参したナッツケーキを食べて簡易昼食とする。なかなかおいしい。文化の香りは更に続く。1時過ぎに今度は日坂（日坂）を描いた広重の版画のモニュメントがある（写真8）。それにしても芭蕉も広重も江戸時代によく日本中を旅して句を作り絵を描いたものだと感心する。

愈々日坂宿に向けての下りである。日坂宿も昔の建物をそのまま残し、人々がそこで生活しながら表には昔の屋号を掲げている。正に江戸時代に旅をしている気分である。ふと見ると小さいパン屋がありここに立ち寄って空腹をちょっぴり満たす。田舎に置いておくのは勿体ないくらいおいしい味だ。帰京後インターネットで調べたら結構有名らしい。ここまでで15000歩、14時になる。

後は平坦な道を掛川宿に向けてひたすら歩くのみで、16時54分何とか明るいうちに掛川駅に着き、簡単な腹ごしらえをして17時38分のこだまで帰京した。3日目はこれまで東海道を歩いてきた中で最も変化に富んだ旅で実に思い出に残る旅となった。家内もはじめは心配だったが、途中から元気になり二人で小夜の中山を走破できたのは誠に嬉しく、今後の自信に繋がるものである。さて、次の目的地は浜松だ。



写真1 丸子宿 丁子屋



写真2 宇津ノ谷の街並み



写真3 島田の芭蕉の句碑



写真4 川越（かわごし）街道の街並み



写真5 大井川



写真6 金谷の石畳



写真7 小夜の中山を越えた峠の頂上で



写真8 広重の小夜の中山 Monument